

【 宮城県石巻市の方言概観 】

ここでは、今回の会話集に現れた特徴を中心に、伝統的な石巻市方言の音声や文法を概観していきます。

㊦ 音 声

【子音】

▼カ・タ行の有声化

語中・語尾にあるカ・タ行の音が有声化し、ガ・ダ行になる。

☞これは平たく言えば、単語の頭以外にあるカ・タ行の音が濁音のガ・ダ行になることで、有声化と呼ばれる現象です。専門的には、母音に挟まれた無声子音/k/t/が有声子音/g/d/になること、と説明されます。但し、単語の頭に位置するカ・タ行の音は普通は有声化しません（下の例で言えば柿は「ガギ」にはなりません）。

例) カ行→ガ行 (/k/→/g/) : 開ける → アゲル、柿 → カギ
タ行→ダ行 (/t/→/d/) : 旗 → ハダ、 的 → マド

この特徴は、この会話集に収録された用例にも数多く見られています。例えば、カ行音については、「ウチノナガ」（家の中）、「ジューギ」（重機）、「ワーグマン」（ワーカーマン）、「余計」（ヨゲ）、「オゴラエタ」（怒られた）のように、語中のカ行音が濁音となっていることがわかります。また、タ行音も「ワダシ」（私）、「ヒトダジ」（人たち）、「フタズ」（二つ）、「タノマエデ」（頼まれて）、「ドゴ」（所）のように濁音化して現れている例が多く見られます。ただし、完全にガ行ダ行の音に濁るのではなく、共通語の発音よりは濁っているという程度の発音も多く聞かれます。また、話者によってもその濁り方の程度には差が見られます。

▼ガ・ダ・ザ・バ行の鼻音化

語中・語尾にあるガ・ダ・ザ・バ行の音が鼻音化する。

☞単語の頭以外にあるカ行がガ行になることによって、「開ける」はアゲルになってしまい、「上げる」と混同しそうですが、「上げる」のほうはゲが鼻にかかった音（ここでは「ヶ」のように半濁点を用いて表記する）のアヶルとなり、

「開ける」＝アゲル

「上げる」＝アケ^ル

で両者の混同は起こりません。このようにもともと濁音の「ゲ」と発音されていたものが「ケ^ル」に変化するような現象を鼻音化と言います。会話集から少し抜粋してみますと、「ワカイコカ^ル」（若い子が）、「ツキ^ル」（次）、「ナカ^クツ」（長靴）、「ナケ^ルタ」（投げた）、「ヨコ^レタ」（汚れた）のように現れていることがわかります。

同様にダ・ザ・バ行も鼻音化します（ここでは「ンダ・ンゼ・ンビ」のように上付きのンで表記します）が、これらは衰微が著しく、今回の会話集の中にはほとんど聞かれませんでした。

例) ダ行：肌 → ハンダ
 ザ行：風 → カンゼ
 バ行：首 → クンビ

▼キ（キャ行）の口蓋化

キが「チ」と発音される。また、キャ、キュ、キョも「チャ、チュ、チョ」と発音される。

☞一般的にはこれは「口蓋化」の一種と見られています。口蓋化とは舌の前の部分が上あご（硬口蓋）に接近する現象を言います。キがキとシの中間のような音になるという、似た現象は東北一般で広く見られますが、特に石巻市では極端な口蓋化が起こってチに近くなって聞こえることがあります。

例) 機械（きかい） → チカイ
 木（き） → チ
 菊（きく） → チグ
 救急車（きゅうきゅうしゃ） → チューチューシャ
 今日（きょう） → チョー

ただし、今回の会話集の話者たちはその傾向も弱まっているように見受けられます。

▼シとス、ジとズ、チとツなどの中舌化

イ段音とウ段音が近い音となる。

☞イの音がウの音に近づく現象（またはその逆も）を「中舌化」（ちゅうぜつか、なかじたか）と言いますが、石巻ではイ段音とウ段音でこの中舌化が起き、ニとヌ、ミと

ム、リとルなどが互いに近い音になります*。これらは一応の区別がありますが、シとスに関しては両方とも「ス」、ジとズは両方とも「ズ」、チとツは両方とも「ツ」と発音され、これらは区別がありません。ズーズー弁と言われるゆえんです。

例) 獅子 (しし)、煤 (すす)、寿司 (すし) → すべてスス
知事 (ちじ)、地図 (ちず)、辻 (つじ) → すべてツズ

※ただし、母音単独のイだけはエに統合されます (後述)。

今回の会話集では「ハスタデネー」(半端でない; ハシタデナイ) や「フンズゲテ スマッテ」(踏んづけてしまって)、「ズエータイ」(自衛隊) のような例を確認することができます。

▼シュ、ジュ、チュの直音化

シュが「ス」、ジュが「ズ」、チュが「ツ」と発音される。

☞これに上記の中舌化も合わせると、シ・ス・シュがすべて「ス」、ジ・ズ・ジュがすべて「ズ」、チ・ツ・チュがすべて「ツ」という発音となります。

例) 爺さん (じいさん)、十三 (じゅうさん) → 両方ともズーサン
手術 (しゅじゅつ) → スズツツ
注射 (ちゅうしゃ) → ツーシャ

▼その他にも、以下のような特徴があります。

・母音単独のイとエの区別がなく、エに統合されている。

例) 息 (いき)、駅 (えき) → 両方ともエギ
鯉 (こい)、声 (こえ) → 両方ともコエ

・アイ・アエという母音の連続 (連母音) は融合して[ɛ:] (共通語のエー[e:]よりも口を開いて発音する) と発音される。また、連母音の融合は県内でも特に顕著である。

例) 大工 (だいく) → デーク
臭い (くさい) → クセー
若い (わかい) → ワゲ

- ・ヒの音がシに近い音となる。

例) ゴミ拾い (ゴミヒロイ) → ゴミシロイ

- ・ユの音が口蓋摩擦音を伴い、ズに近く発音される。

例) 雪 → ズキ
ゆうべ → ズーベ
指 → ズビ
湯 → ズ
寄ったから → ジョーッタツケ

- ・二重子音ツシヤ、ツシヨが見られる。

例) 支所 → ツシヨ
知らない → ツシヤネ
悪さ → ワツシヤ

¶ アクセント

石巻市は、仙台市以南の無型アクセント地域とは異なり、東京式アクセントに準ずる有型アクセントである。

☞例えば「箸」と「橋」を声に出したときに、有型アクセントの地域ではハとシの音の高低が決まっています (=型がある)、それによって単語の区別が付きませんが、無型アクセント地域では高低が決まっていない (=型がない) ため、区別されません。石巻は有型アクセントの地域と言われています。ただし、語によってアクセントの揺れが激しく、助詞をつけた文では東京式のアクセントで発音されても、助詞をつけなかったり、単語言い切りの場合などには、共通語とは異なったアクセントになることもあります。

Ⅱ 文 法

【格助詞】

▼「が」「を」の不使用

共通語の「が」「を」にあたる格助詞を使わないことが多い。「を」格相当のものとしては「バ」や「ドゴ」が用いられることもある。

☞共通語の「が」のような主語を表す助詞や、「を」のような目的語を表す助詞が用いられず、以下のように無助詞で表示されることがよく見られます。特に、「を」にあたる助詞に顕著です。

例) 主語 : 俺 行く (俺が行く)
目的語 : 酒 飲む (酒を飲む)

今回の会話集の話者たちからも、「ヒド イダヨー」(人がいたよ)、「アタマ サカ^oル」(頭が下がる)、「クイモノ モッテコナキャナイ」(食べ物を持ってこなければならぬ)、「ヤマ コエデー」(山を越えて)などのように、「が」や「を」を使わない発話が聞かれました。

▼「サ」

共通語の「へ」「に」に当たる格助詞に「サ」がある。

☞「サ」は共通語の「へ」よりも意味が広く、「に」に重なるところも多くあります。

例) ドゴサ イク^oノ (どこに行くの)
ハダゲサー インカト (畑に行くかと)
タスケサ イク^oノ (助けに行くの)
バスサ ノッテ (バスに乗って)

【助動詞】

▼「べ」

共通語の「～だろう」(推量)や「～しよう」(意志)に相当する助動詞に「べ」がある。

☞「べ」は<推量><意志>のほかにも<確認><勧誘>などがあり、その用法は多岐にわたります。また、「取る、起きる、来る」など「る」で終わる動詞に接続するときは「る」が「ッ」となる促音便が生じ、それぞれ「トッペ、オギッペ、クッペ」の

ようになります。

- 例) 明日、雨だべ。(明日雨だろう。) <推量>
明日は早く起きッぺ。(明日は早く起きよう。) <意志>
お祭り、お前も行くべ?(お祭り、お前も行くだろう?) <確認>
みんなでがんばッぺ。(みんなでがんばろう。) <勧誘>

今回の会話集では、「ネーゲ フズユーダベチャヤ」(無ければ 不自由だろうよ)、のような推量する用法や、「イラネーンダベ」(いないんだろう?) のような確認する用法、「トーカド カガッタンデネベガ」(十日とかかったんでないだろうか) などのように「～ベガ」の形で相手に確認をとる用法が見られます。

▼「タ」「タッタ」

「タ」は共通語の過去・完了の助動詞「た」よりも用法が広く、現在目の前にあることの確認などにも使われる。

- 例) (私は今、) 学校にいる → 学校にイタ
(私は今、) 手紙を書いてる → 手紙をカイテタ

また、「タッタ」は過去の思い出など、現在と切り離された過去で用いられる。

☞「タッタ」は、「タ」と比べて過去の出来事が発話時に存在する場合には使われにくく(この場合は「タ」が用いられます)、過去の出来事が発話時に存在しない場合に使用しやすくなります。これを上記では「現在と切り離された過去」と表現しました。

以下の例で説明すると、①は昨日もらった桃が今もあるときの発言であり、これは過去の出来事が発話時に存在すると読みとることができます。このような場面では「タ」が使われます。②は昨日もらった桃が今はもうないという状況であり、これは過去の出来事が発話時に存在しないと捉えられます。このとき、「タッタ」が用いられます。

- 例) ①きのう、近所の小沢さんに桃をモラッタ。あんたも食べる?

②きのう、近所の小沢さんに桃をモラッタッタ。

あんたが来るなら少し残しておけばよかったなあ。

<例文は竹田(2011)より引用>

今回の会話集では、「オヤンツ イダガ」(お父さんいるか) のような用法が見られます。

【終助詞】

▼「チャ」

強調、当然、働きかけの意味を表す「チャ」が用いられる。

☞具体的には、相手が知っているはずの事柄を示し確認させるなどの機能があり、共通語の「でしょ」「じゃない(か)」「よね」などのような意味を持ちます。

例) イザツツートキ コゴ イク[°] ッチャー (いざという時ここ行くよね)
ヨコ[°] レタママ カエッテッタチャ (汚れたまま 帰ってったよね)

【接尾辞】

▼「～コ」

名詞のあとに「～コ」を付けて、そのものへの親近感を表す。

例) ヨッテ オジャッコ ノンデッテー (寄ってお茶飲んでいって)
ナヤッコ カタズゲッカ (納屋片付けるか)

★その他、以下のような特徴もあります。

・逆接既定条件(共通語の「けれども」)は「ケッドモ」が用いられやすい。順接既定条件(共通語の「から」)は「ガラ」が用いられる。

例) ワタシワ ソノヒトモ ワカッケッドモ (私はその人もわかるけれども)
ンダケドモ コノ ジュータイノ ヒトワ (だけどもこの自衛隊の人は)

アツガッタガラネー (暑かったからね)
カナズズ ネーガラ トッカグ アルモノデ (金づち無いからとにかく有るもので)

・待遇表現は「ス」「(デ) ガス」「(ラ) イン」などが用いられる。

例) カタズケテ ヤルスカ (片づけてあげますか)
ナジョデガスー (どうですか?)
サムイガラ キオツケラインヨ (寒いから気をつけなさいよ)

【参考文献】

- 石巻市史編さん委員会編「言語編」『石巻の歴史 第三巻 民俗・生活編』石巻市
- 加藤正信（1969）「東北方言概論」『言語生活』210
- 加藤正信（1992）「宮城県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・
久野マリ子・杉村孝夫編『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院
- 小林隆編(2003)『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 佐藤亨（1982）「宮城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学4 北海道・
東北地方の方言』国書刊行会
- 竹田晃子（2011）「テンス形式および文末の「ケ」の用法」小林隆編『宮城県・山形県陸羽
東線沿岸地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救うー3.11 被災地からの提言ー』
ひつじ書房